

古代文字資料館蔵ウィマ・カドフィセス発行銅貨  
—図像について—

吉池孝一

1. はじめに



表



裏

古代文字資料館にクシャン朝の王、ウィマ・カドフィセス（在位は一説に紀元後120-143年。カニシカ王の父親）<sup>1</sup>発行の銅貨が複数枚ある。そのうち今回は図像が明瞭な銅貨を紹介する。図像が明瞭な金貨はしばしば目にするが、銅貨でこれほどまでに明瞭な図像が保存されているものは稀であり、これによって図像の原型を推測することができるのではないかと期待している。この銅貨の重さは16.7g、最大径27mm、厚さ3mm。上に提示した左の画像（表）は王の立像。周囲にギリシア文字で書いたギリシア語の銘文がある。右の画像（裏）は牛と神の立像。周囲にカローシュティー文字で書いたガンダーラ語の銘文がある。

2. 同種のコイン表とその解説

これと同種の銅貨が渡邊弘（1973:60）に三枚掲載されている。表の拓本と表の図像に対する解説はつぎのとおり。

表図像の解説

鉢巻をしめ、クシャーン族特有の山高帽を被り、ズボンをはき、外套をはおり、剣を帯び、ブーツを履いた国王立像（正面向、頭部は左向）。国王は右手を左方の小さな祭壇の上にかざしている。祭壇の傍には“戦斧兼三叉

<sup>1</sup> 小谷仲男(2003:212)による。

戟”を、国王の右方には刺のある棍棒を配す。“祭壇で（犠牲の）宗教的儀式を行う国王立像”のモチーフは以後のクシャーン族の貨幣、グプタ王朝のそれへと踏襲される。

表の拓本



118



119



120

同種の別コインについて、Gupta (1969)は“King standing with his head turned left, offering with his right hand on an altar. (王は頭を左に向けて立ち、右手を祭壇にかざしている)”とする<sup>2</sup>。なおこのコインは渡邊弘 (1973)の 119 に類似している。二つの文献は、解説において、① “左手の動作には言及しない”、② “祭壇もしくは拝火壇に右手をかざす”という点が一致する。古代文字資料館所蔵コインによって図像を確認すると次のようである。

### 3. 古代文字資料館所蔵コインの図像



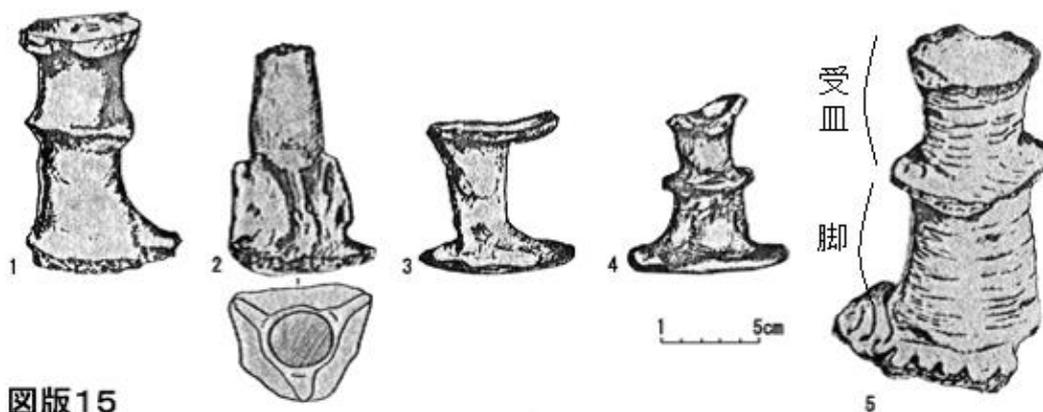
図像がきわめて明瞭で、左右の足と右腕に外套のシワが縦に短く 3 本描かれているのを確認できる。顔は向かって左向き。大きな目、高く大きな鼻を確認

<sup>2</sup> 山崎元一ほか訳 (2001:255)のコイン 64 の解説による。

できる。さて、第 2 節で挙げた二つの文献はともに①“左手の動作には言及しない”。そこで、渡邊弘 (1973:60)の三種拓本と古代文字資料館所蔵コインの画像をみることにする。左手と棍棒の関係がそれぞれ異なる。118 と 119 と 120 は左手と棍棒は離れており棍棒を握っているとはかんがえにくい。左腕は肘から曲がっているのだが、腕の先の手がどのようなになっているか、確認することはできない。それにたいして、古代文字資料館所蔵コインは、左手で棍棒を抱え持っているように見えなくもない。もっともそのように解釈すると右腕にくらべて左腕が短くなってしまう。あるいは、腕の先の手は腹部の前にあり、手の甲と指のようにもみえる。いま少し明瞭なコインがでてくるまでは、左手がどのようなになっているかは不明とせざるをえない。左手の動作に言及しない二つの文献の記述①は穏当なところであろう。

つぎに、②“祭壇もしくは拝火壇に右手をかざす”という解説であるが、古代文字資料館所蔵のコインには当てはまらないようにみえる。小型の「拝火壇」(「火桶」と称していいのかもしれない)を右手に吊るし持っているようにみえるのである。それは、右手の先と「拝火壇」の間が一本の線につながっている、および腕の傾きと同じく「拝火壇」もやや斜めに傾いているという二点から得られる印象である。「拝火壇」がやや斜めになっているという点は、渡邊弘 (1973:60)の 119 も同様。

右手に吊るし持っているとなると移動することができる小型の拝火壇でなければならないが、そのような小型の移動式の拝火壇があったのかということが問題となる。この点について、Y.ヤクボフ著(1996)、蓮池利隆訳(2010:16-17)によると、タジキスタンのゼラフシャン河の南に位置するガルダニ・ヒソル拝火神殿の居住地区からマジマルと称される四つの移動式祭壇(図版 15 の 1-4。粗い粘土の手捻りで作られている。大きさはまちまちで、脚の高さは 8cm から 14cm、



図版15

Y.ヤクボフ著(1996)、蓮池利隆訳(2010)による  
吉池が5に受皿と脚の指示を付した

受皿の直径は4cm から8cm、脚の底部分の直径は8cm から10cm という) が発見されているという。図版15の5は、ガルダニ・ヒソルから7Km 離れたクム遺跡から発見されたマジマル。全体の高さは18cm、底の直径は13.5cm、受皿の直径は8cm という。説明によると「受皿」の底に火の痕跡があるという。

また、同書によると、バーミアンの小仏陀壁龕の壁画に、左手に炎の上がるマジマルを持ち、右手には小枝を持っている顎鬚のある鳥人間が描かれていて(図版、11-1)、これは預言者ザラドゥシュト自身であるという。なお壁画は紀元後5～6世紀に算定されている。

クシャン朝のウィマ・カドフィセス発行銅貨の「拝火壇」と、これらのマジマルがどのような関係にあるかわからないが、小型の移動式「拝火壇」のようなものがあつたこと、それを手に持つばあいがあつたことはここに示されている。



図版11-1

Y.ヤクボフ著(1996)、蓮池利隆訳(2010)による

なお、さきに提示した四つのコインは、「拝火壇」、棍棒、三叉戟の位置がそれぞれ異なる。位置の異なりが生じた経緯はつぎのとおりであろう。まず、原型の金型によって打ち出されたコインが発行された。その後その原型の図像によって、各地で新たに金型が作られコインが発行された。また同一地域であっても年代を経て新たな金型が作られコインが発行された。このようにして制作地や時代の異なる新たな金型により打刻し発行されたため図像に異なりが生じた。原型の図像がどのようなものであつたかは今後の課題であるが、古代文字資料館所蔵の王の立像は、顔と体、および「拝火壇」、棍棒、三叉戟も大きく、細かいところまで描写されており、金貨の図像に類似している。初期の図像を反映しているとみてよいであろう。

#### 4. おわりに

ウィマ・カドフィセス発行銅貨の表の図像について不明な点が二つある。一つめは「拝火壇」に右手をかざしているのか、あるいは「拝火壇」を右手で吊るし持っているのかということである。わたしは後者であると考えているが、それは図像から得た印象であり、その考えを支える確かな根拠が必要である。二つめは左手の動きはどのようになっているのかということである。この点については明瞭な図像を持つ初期の貨幣によって確認しなければならない。すでにいずれかの研究機関に所蔵されているかもしれないし、今後新たに発掘されるかもしれない。

なお、表の銘文はギリシア文字で書いたギリシア語である。銘文の一部が磨滅しており渡邊弘(1973)で補って読むと「*basileys*(王)、*basileōn*(諸王の)、*sōtēr*(救済者)、*megas*(大いなる)、*ooēmokadphisēs*(ウィマ・カドフィセス)」とあり、『諸王の王、偉大なる救済者、ウィマ・カドフィセス』となる。裏の銘文はカローシュティー文字で書いたガンダーラ語である。全体に磨滅が進んでおり判読は困難。古代文字資料館には今回扱った図像が明瞭な銅貨の他に、銘文が明瞭な銅貨もある。銘文についてはその銅貨をもちい、稿を改めて述べることにする。

#### 【参考文献（発行年順）】

- グプタ, P.L. 著(1969)、山崎元一他訳(2001)『インド貨幣史 ―古代から現代まで』刀水書房。  
田中美知太郎、松平千秋(1970)『ギリシア語入門 改訂版』岩波書店。もと 1951 年。  
渡邊 弘(1973)『西域の古代貨幣』学習研究社。  
Göbl, R.(1984)*System und Chronologie der Münzprägung des Kušānreiches*.Wien.  
Y.ヤクボフ(1996)、蓮池利隆訳(2010)『古代ソグドの宗教』。科研「タジキスタンにおけるゾロアスター教遺構の発掘調査」の成果報告。  
山崎元一(1997)『世界の歴史3 古代インドの文明と社会』中央公論社。  
小谷仲男(2003)「クシヤン族とガンダーラ仏教」、『NHKスペシャル文明の道 ②ヘレニズムと仏教』日本放送出版協会,200-225 頁。